

1985年を思い起こす・時間を考える

3月下旬小田原三の丸ホールでミヒャエル・エンデの「モモ」が上演された。「モモ」は私の愛読書でリーダーになる人に必読書として勧めてきた。私が「モモ」で想起するのが時間の二つの側面、即ち「クロノスとしての時間」と「カイロスとしての時間」である

1、時間を考える

「クロノス時間」は、時計が刻む、万人共通の客観的な時間、過去、現在、未来と流れていく時間。私たちが歳をとるのもこの時間である。

「カイロス時間」は、人それぞれが特別のこととして忘れられない主観的な時間、記念になる時、クロノス時間を切り裂くような事件の時や『その時！ 歴史は動いた』というような時のこと。（共にギリシャ語）

歴史を紐解くと40年間というクロノスの時間の節目に忘れられないカイロスの時間をみ出すことが少なくいことを古来から識者賢者は伝えている。その最も有名なのはモーセの出エジプトの出来事、即ち。一世代にわたる試練と苦難のときを忍んで約束の地に入ることが許されたこと。

今年は敗戦後80年という時を迎えて、私たちが生きてきた時代を振り返る記事が多い。そこで40年を一つの区切りとして遡ってみるとどうなるか。その時がカイロスになるか考えて振り返ってみた。その時は1985年、この年は世界の多くの国に影響を与えたのが「プラザ合意」である。

2、1985年のプラザ合意

ここからしばらくプラザ合意について復習する。

1980年代前半、アメリカ（大統領はレーガン・レーガノミクスは有名）は財政収支赤字と貿易収支赤字という「双子の赤字」（世界最大の赤字国）に悩まされていた。

5カ国（日、米、英、独、仏）が外国為替市場で協調介入を行うことで、ドル高を是正して、アメリカの貿易赤字を削減する。参加国の通貨を10%～12%切り上げる

その合意を9月22日ニューヨークのプラザホテルで締結した。

(1)日本への影響

①円高とはどういうことか。

1985年初め、250円／ドルが年末には200円／ドルという円高ドル安となった。

250／ドルとは250円で1ドル買える。200円／ドルは200円で1ドル買える。1ドルを250円を買っていたのが200円で買えるようになった。円が強くなったので円高という。
輸出産業が打撃を受け下請企業（町工場）が倒産するという側面と、安い輸入品が入ってくると国産品との価格競争で国内産業の利益も圧迫され円高不況となった。

②その後日本経済はどうなったか

円高で競争力の落ちた日本国内の輸出産業や、製造業を救済する為に、1987年2月までに5回の公定歩合引き下げが行われた。その結果日本経済は過熱し、お金がだぶつき、不動産や株式の価格が実体経済の成長を大きく上回る異常な高騰をするバブル期（1986年12月から1991年2月）となる。1988年の年初には、128円／ドルまで円高となったがバブルは収まらず、1989年12月29日株価が38,915円（2024年までは最高価格であった）となりバブルは絶頂に達する。

日本銀行は、インフレを抑制し経済の過熱を冷ます目的で、1989年末から金利を段階的に引き上げます。株価は1990年1月4日より下がり始め、4月2日28,002円、年末には23,848円となり1年間で39%下落した。失われた30年の始まりであった。

3、この間のドル／円。

1994年6月には100円／ドルを突破（99円／ドル）、1995年4月19日、79円／ドル
1995年10月から2008年9月までは101円から140円の間を上下してほぼ安定していた。

2008年10月から2013年10月まで二桁となり97円から99円と高値安定

2013年11月三桁の102円となり2022年5月まで100円から130円で推移

2011（平成23）年には東日本大震災の発生による円需要の高まりなどによって再び80ドルを割り、その年の10月末に最高値75円32銭を記録した

2022年6月から130円台（10月には32年振りに150円）、2023年5月に140円台、2024年6月は160円となり、以降今日まで徐々に140円に近づいている。



5カ国間の合意でアメリカの窮地を救ったのがプラザ合意である。そして40年間世界は均衡を求めて、地域の特性を活かした国際分業も進んだ。グローバル経済の良い面が現れていた。今回もアメリカは危機である。それを力でねじ伏せようとしているように思われる世界的な付度が制度化される、その体制を人間は何と名付けるのだろうか。

4、1985年はどんなことが目立ったか。

1985年を別の角度からみると今年に通じるものがある。

(1)悲しいことであるが民間航空機の事故が多発した年であった。

2月16日 中華航空006便急降下、乗員乗客52人負傷

6月23日 インド航空182便爆破事件、乗員乗客329人全員死亡

8月02日 デルタ航空191便墜落事故、乗員乗客163人のうち134人と地上にいた1人死亡

8月12日 日本航空123便墜落事故、乗員乗客524人のうち520人が死亡、

単独機として史上最悪の事故

8月22日 ブリティッシュエアウエイズ28M便火災事故乗員乗客137人のうち55人が死亡

12月23日 サンバレーモール墜落事故（カリフォルニア州）

搭乗していた3人と地上の4人が死亡。

誰でもがみることができる資料から集めてみただけでも悲慘が重なっている。特に日本における日本空港123便の墜落事故は原因解明に不思議な時間がかかったことも記憶に新しい。

2025年はまだ4ヶ月の経過であるが小さな航空機事故が報告されている。異常気象や国際状況の緊張感が高まる中、文明人の自惚れによる隙間から大きな事故が発生しないように祈る。1985年に話を戻したい。

(2)防衛費について。

1985年1月31日中曽根康弘首相が防衛費GNP比1%枠突破の可能性について言及して、衆議院予算委員会が混乱状態になった。1%枠は三木政権以降の歴代政権が踏襲してきたことであった。（昭和五十一年十一月、当時の三木内閣は、「当面の防衛力整備について」の閣議決定を行い、「防衛力整備の実施に当たっては、当面、各年度の防衛関係費の総額が当該年度の国民総生産の百分の一に相当する額を超えないことをめどとしてこれを行うものとする」との方針を決定した。）1987年は1%を超え保守層からは歓迎された。その後はなぜか総額方式になってしまった。

2025年防衛費は1.8%で2年後には2%にする方針である。時あたかも、アメリカ大統領は3%の要求をしそうな雰囲気である。

(3)民営化の始まり

4月1日日本電信電話公社がNTT（日本電信電話株式会社）、日本専売公社がJT（日本たばこ産業株式会社）に民営化が始まった。1987年日本国有鉄道が分割され民営化、2007年日本郵政公社が分割され民営化がなされた。

NTTは9月にショルダーフォンを発売した。（携帯電話の始まり）

(4)その他、

現在との関係があるのが国籍法の改正で、国際結婚の際に夫婦同姓・夫婦別姓のいずれも選択可能になった。学校でのいじめが増え「いじめ元年」という汚名もある。

2025年がどんな年になるか。波乱の年になることは間違いない。波乱を起こすのは一部の人間であるが、それを担うのは大衆である。往々にして大衆は権力に靡く。かつて歴史を動かしてきた中産階級は消えてしまったようである。プロテスタンティズム零の意味が明確になる年であると思う。それゆえに賢い大衆になりたいと思う。

5、40年を経て、再びアメリカは何を狙っているのか

アメリカの大統領は「強いアメリカ」を目指して関税をゲームのように楽しんでいる。これだけグローバル化した世界では、どの国もこのゲームから逃げることができない。このゲームの後に何がくるか。40年前を振り返ってみた。直近のことは分からないが、時代の流れはいくつかの仮説が出ている。その中で私が同感しているのがエマニュエル・ドットさんの「西洋の敗北」に記されている世界の情勢である。

内容は広範囲で専門的用語が多いので要約は難しいが、この著作のベースには「プロテスタンティズム・ゼロ状態」という考え方がある。著者自身がマックス・ウェーバーの研究者と自称しているように、分析方法も歴史の「担い手」論が採用されている。マックス・ウェーバーが日本人によって紹介されたのは1905年（今から120年前=40×3）、その後1920年に出版された「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」はつとに有名で、その著の結論の部分は現代の核心をついている。識者には常識となっている文章であるが、より多くの人に知ってもらいたいので紹介をする。

営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない。将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、そして、この巨大な発展が終わるとき、まったく新しい預言者たちが現われるのか、あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか、それともそのどちらでもなくて一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰にも分からない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現われる「末人たち」 Letzte Menschen 《にとっては、次の言葉が真理となるのではなからうか。「精神のない専門人、心情のない

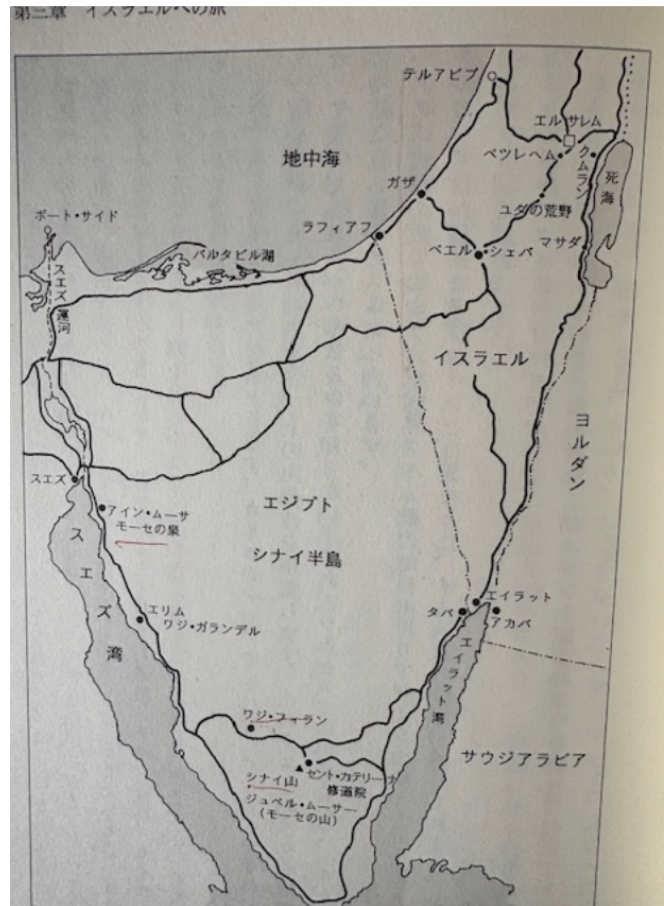
享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことの無い段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう」と（大塚久雄訳・岩波文庫p366）

なお、著者には「職業としての学問」「職業としての政治」の著作があり、学問を志すもの、政治を志すものには必読の書となっている。昨今の世界や日本を見渡して、もはやその存在は忘れられているようである。

6、私の1985年

この年の3月の下旬から4月にかけて2週間の初めてのイスラエル旅行の年である。エジプト空港を利用してマニラ、ドバイ経由の南回りでカイロに到着、そこからスエズ運河を渡ってシナイ半島を南下してから北上するという出エジプトの道を体験できるツアーがあった。

エジプトとイスラエルの国境はタバであったが、その年はまだ平和が続いており国境の緩衝地帯は20メートル程度で両国の兵隊さんと握手をすることができた。戦争は回避できることが証明された数年間がこの地にもあったのである。シナイ山には深夜から上りはじめて日の出を頂上でみるというハードな旅であったが、旧約聖書と新約聖書の両方を体験できる唯一の旅であった。詳細は自著「花の中の碑・平和を願う『念ずれば花ひらく303番碑』物語」に記した。この旅の魅力に取りつかれてこの年のクリスマスにも単独で2回目の旅をした。



iPhoneから送信

最初の旅は240円／ドルであったが1970年に初のアメリカ研修では360円／ドルであったので旅費は格段に安く感じられた。2回目はプラザ合意の後であったので120円／ドルで一人旅でも手の届く値段であった。3回目は1986年8月31日突然に行かなければならない事件が起こった。

83歳の隠退牧師が単独でヘブライ語を学ぶためにイスラエル旅行を敢行された。1週間後に急死されたが身寄りがなく遺体の引取りを私の恩師滝沢陽一先生に外務省から依頼された。一人では危険だったので私が同伴の誉を受けた。インテファダーの先駆けのテロが頻

繁に起こっており、私たちが前泊したパリでも近くのホテルでテロ行為が起きた。嚴重なチェックを受ける旅となり、特にテルアビブ行きの飛行機の搭乗は厳しく滑走路も一番不便なところにあった。

遺体はワイツマン科学研究所にあった。真夏の炎天下で遺体の確認をして納棺の手続きをして封印は日本領事館の職員の仕事であった。遺体の中に爆弾が入っているかもしれないということで24時間屋外監視ルールが適応され、納棺された物体は飛行場の端に24時間野ざらしにされた。この手続きの間はテロの恐怖は感じる暇もなく、ひたすら暑さ（炎天下では50度を超えていた）と戦いながら任務に当たった。

この24時間ルールが適応されている間に領事館の人がゆっくり休んでいいと言われたので、テロの怖さも忘れてエリコ（ヨルダン川西岸地区）を經由して死海まで一日トリップをした。こんな経験から益々中東への旅の魅力に惹かれてシリア、ヨルダン、トルコ、エジプトを經由してイスラエルに入国をするという旅を15年近く続けた。そして1994年3月31日ヘブライ大学の植物園に「平和を願う」碑を建立することになった。まさに私のカイロスとなった時である。残念ながら21世紀になってイスラエルが壁を建設するようになってからは熱が冷めてしまったが、2018年、20年ぶりに訪問した。これが私の海外旅行の終わりとなった。

関西万博に思うこと

今年は2回目の大阪万博の年である。1回目は1970年であった。

この年も私のカイロスがあった。初めての海外研修旅行の機会が与えられた。3ヶ月というこの時代では長い旅でアメリカの西海岸から東海岸までを視察と学びの体験ができた。アメリカの生活で大阪万博の話が出るだろうから観察しておく必要があるということで日帰りで一日見学に行ったことを思い出す。

この年はジャンボ機747がホノルル線で飛んだことで話題になった。ところが私たちは8月の半ばの出発でホノルルに寄らずに直行便でサンフランシスコに到着した。こんなことにも感動したものである。今年は747機は使命を終えて姿を消した。40年間というのはクロノスの一つの節目のようである。



クロノスの中にカイロスを見出すのは神の導きである。悲しいカイロスを含めても、その時が多いことは豊かな人生だといえる。

パリ通信・第160号

アルテミジア・ジェンティレスキ

パリは4月に入り例年になく高温が続き、「復活祭」(今年は4月20日)を待たずに街路樹の新芽が開き、桜、ライラック、椿などの花々が咲いて春爛漫だ。学校関係は11日(金)夜から2週間の復活祭休暇に入り、多くの人が動く観光シーズンが始まった。

4月は展覧会の時期でもあり、ブローニュの森にある「ルイ・ヴィトン財団」ではイギリスの現存画家デイヴィッド・ホックニー(1937-)の春に相応しい色とりどりの作品展示(4月9日から8月31日まで)が始まり、フランス・ノルマンディー地方を描いた作品を中心に400点近い展示で楽しみである。

その前に、パリ8区ジャック・マール・アンドレ美術館で一足早く始まった「アルテミジア・ジェンティレスキ展」(3月19日から8月3日まで)に行った。

アルテミジア・ジェンティレスキ(1593-1656)はオラツィオ・ジェンティレスキ(1563-1639)の第一子としてローマで生まれる。父オラツィオはフィレンツェ生まれでトスカナ後期マニエリス最後の画家で、ピサからローマへ移り80年後半にはヴァチカンの装飾にも招聘される。ローマでカラヴァッジョと出会い交友関係を結びその影響を受けた人だ。ローマからファ

ヴリアーノ、アンコーナへ移動し、1624年にはパリに呼ばれる。メディチ家出身マリー・ド・メディチ(1575-1642)がフランス王アンリ4世の妃、ルイ13世の母としてフランス宮廷に君臨し、フィレンツェに縁の深いオラツィオがフランス宮廷画家となる。短いパリ滞在ではあるがリュクサンブール宮の装飾、フォンテヌブロー派を思わせる「狩りの女神ディアナ」(フランス・ナント美術館所蔵)(写真左)などを残している。伝統的に空の三日月、猟犬グレーハウンド、弓と一緒に描かれる女神ディアナであるが、頭の大きさに対して全身が長すぎるマニエリスム特有の縦に細長い美しい絵である。1626年戴冠したばかりのイングランド国王チャールズ1世に宮廷画家として招聘されたオラツィオは、息子3人を連れてロンドンに渡り1639年ロンドンで生涯を閉じる。



娘アルテミジアは父の工房で育ち、画家として類稀な才

能を認めた父オラツイオは一番弟子として娘に絵を教える。父親か夫の庇護がなければ絵を学ぶことも職業として選ぶこともできない時代である。父オラツイオの絵を見て、父の画風を身につけ、10代で父を超えるまでに成長する。今回展示されている「スザンナと長老たち」(1610)(170x119cm)(ドイツ、ポメルスフェルデン所蔵) (写真右) はアルテミジア17歳の作品である。

旧約聖書エステル記を題材にした「エステルとアハシュエロス王」(1628頃)(208 x 274cm)(ニューヨーク・メトロポリタン美術館所蔵) (写真下) は父を凌駕する大作である。不幸なことに1611年アルテミジアは父親の友人でアトリエを共有する画家アゴステーノ・タッシの性的暴力を受ける。オラツイオは娘をタッシに嫁がせるつもりではあったがこの事件は1612年春から秋までかかる裁判へと発展した。裁判には勝訴したものの今日の裁判からは程遠くタッシは法皇の保護でローマ追放の判決を実行されることもなく、アルテミジアに大きな傷を残した。この強姦事件を機にアルテミジアは別の画家と結婚しフィレンツェに活動の場を移した。



父親のもとを離れ一人の画家として名を成していくが、ローマで知った父親の友人カラヴァッジョとの出会いがアルテミジアの画風を確固たるものにする。旧約聖書ユデイト記に登場する美しいユダヤ人ユデイトはベトリアの町を包囲したアッシリア軍の前に、死を覚悟して敵地に向いホロフェルネス将軍の首を斬り、町を解放へと導く。17世紀に好んで描かれた題材でカラヴァッジョ「ユデイトとホロフェルネス」(1598)を手本にアルテミジア「ホロフェルネスの首を斬るユデイト」(1612-1614)(ナポリ・カポデイモンテ美術館所蔵) (写真右) が描かれる。

「ユデイトと召使い」(1615頃)(ウフィッツイ美術館



所蔵)とともにカラヴァッジョの技法を受け継いだ傑作である。エステルやジュデイトはユダヤの民を守るために死も恐れぬ勇敢な女性たちである。「女性に何ができるかを示すために私は描く」と手紙に残しているように、オラツイオの娘として、またカラヴァッジョの後継者として強い女性を描き続けたアルテミジアは登場人物と変わらぬ強い女性であつたに違いない。(古賀順子記)

注；「アハシュエロス」は新共同訳のエステル記ではクセルクセスとなっている。

